

がんサバイバーを対象とした「前向き研究」

残された人生が短い状況においても人は「前向き」になれるのか/なってもよいのか



既往研究

- ✓ 自立性が低下した高齢者、終末期を迎えたがん患者にとってQOLは重要なアウトカムである。
- ✓ 「死」を現実のものと意識したがん患者の自殺リスクは高い。強い「否認」により標準治療を拒む患者がいる。一方で、がん罹患後に心理的成長を遂げる患者が存在する。この「前向き」を含む心の両価性の実証されていない。

目的

「前向き」が心身に及ぼす影響を明らかにするために、地域住民の「がん罹患」事例として、事象の定義、測定技術、プログラムの確立を行い、介入試験により実証する。

① 構成概念の定義

- ・ ELSIを含む専門家によるバックキャスト
- ・ 地域住民の意識調査による妥当性評価



② 測定技術確立

- ・ 心身・環境パラメータをリアルワールドで計測
- ・ EHR、PHRの計測

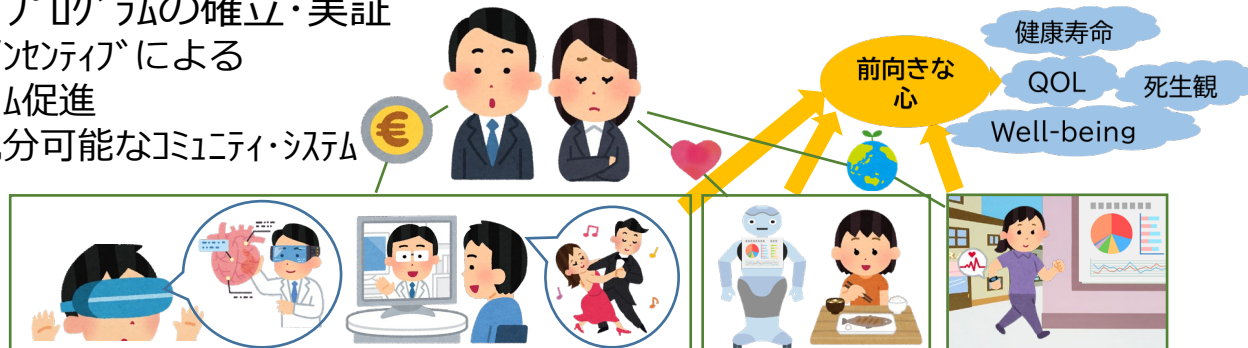


本研究の目標

- ① 前向きの心理尺度や認知タスク、身体情報計測手法を用いて、高齢者と緩和ケアの患者の前向きの在り方を明確にする。
- ② 高齢者と緩和ケア患者における前向き要素と身体情報の関連を明確にし、どの前向き要素と程度が、心身の状態に影響しているかを明らかにする。

③ 「前向き」プログラムの確立・実証

- ・ 個人の価値・インセンティブによる市民のプログラム促進
- ・ 資源の効率配分可能なコミュニティ・システム
- ・ 全国への社会実装



2031年にこの研究により変わる社会

個人の特性に応じた「前向き」を簡便に測定する方法が確立され、個別に最適化された「前向き」プログラムを戦略的に提供することで、無理なく自然に持続的に、科学的根拠に基づく健康寿命延伸、QOLやWell-beingの高い社会が実現する。